

ベニョフスキー書簡がもたらした 海防論といわれる書物の話

奥 正敬

■はじめに

18世紀の後半、モーリツ・ベニョフスキー(Móric Benyowsky, 1746-1786)というポーランド軍の兵士がロシアに囚われ、収容されたカムチャッカから仲間と共に船を奪って脱走しました。彼の船は鎖国体制下の日本沖にも停泊して、当時の世論に大きな波紋を及ぼすことになります。

彼はヨーロッパへ戻ると航海記を著し、それは多くの言語で刊行されました。我が国では昭和の時代になって、日本からマカオへ至る部分を水口志計夫氏と沼田次郎氏が『ベニョフスキー航海記』として翻訳・刊行し、同書に附された「資料編」で彼の日本寄港に関する史料を紹介しています。本稿では、ベニョフスキーの動きと共に日本人によって書かれた「海防論」とよばれる史料を確認したいと思います。

■命知らずの乱暴者

ベニョフスキーは1746年にハンガリーのヴェルボ(現在のスロヴァキア)で生まれました。1764年、18歳になっていたベニョフスキーはカトリック教会から背信行為を指摘され、また翌年には義理の兄弟の土地を奪ったとして訴えられ隣国のポーランドへ逃亡しました。ここでは七年戦争後の不安定な政治情勢の中、ロシアが擁立する政府に反乱を企て、1768年に逮捕されました。さらに、1769年にも独立運動を起こし、ロシアの官憲に捕らえられ、1770年に仲間と共にシベリアの東カムチャッカへ流刑になりました。

しかし、翌1771年に同罪の人たちを扇動して武器と船を奪い脱走したのです。

■オランダ商館長への書簡

当初七十人を超えたとも言われる脱走者たちは、ベニョフスキーの指揮のもと千島列島に沿って南下しました。やがて、日本の海域に入り鎖国中の阿波や土佐の沖合に停泊して日本人と接触しました。1771年の日本は江戸時代中期

ニッポナリアと対外交渉史料の魅力 (31)

の明和八年で、第十代将軍徳川家治のもとで老中格の地位にあった田沼意次が権勢を揮い始めていた時期にあたります。

田沼は翌年、老中に就任すると新田開発や産業の振興策を採り、幕府財政の赤字解消のための経済発展を促しました。蘭学の普及にも力を注ぎ、科学の発達で生産性を高めようとします。これに伴って、世の中も比較的自由に言論を発表できるようになっていきます。

このような時代の訪れの前にベニョフスキーたちが日本の沖合に姿を見せたのですが、彼らが投錨して対応を迫られた藩では、緩和の兆しは見えるものの鎖国体制下に変わりがないため人員の上陸を拒み、水と食料の提供に留めていたようです。その後、さらに南下して立ち寄った奄美からは高地ドイツ語を使って長崎のオランダ商館長に書簡を出してロシアの南進政策を知らせています。

■ハンベンゴロと呼ばれて

商館長ダニエル・アルメナウトの下でオランダ語に翻訳されたベニョフスキーの書簡では、彼の名前を「ファン・ベンゴロ」と誤写された上、幕府側の通詞に引き渡されました。そして、幕臣はもとより蘭学者や知識人の中で「ハンベンゴロ」として流布していきました。

この書簡は日本人には大変に衝撃的であったようで、様々な波紋を引き起こしました。まず、北方からの脅威論が高まり1783(天明三)年に工藤平助が『赤蝦夷風説考』を、また1786(天明六)年に林子兵によって『海国兵談』が著される要因となりました。これらの書物は「海防論」とよばれ、根本は武力による海岸防衛の重要性を説いたものですが、幕府による蝦夷地の開拓や産業振興を通じて北方のロシアとも交易の道を開くことを提案するなど、和戦両様の理論を説いた警世の書でありました。

幕府もこうした意見を取り入れ、蝦夷地を開拓して北方交易を模索するため、1785(天明五)年から実地調査隊を同地に送っていたほどでした。

重商主義とも評され、国内経済を活性化させようとする田沼時代であればこそ、鎖国体制を変容させるほどの発想も容認されていたのですが、1786(天明六)年に彼が賄賂政治などを理